



女性諮問評議会議員の誕生 —女性の教育レベルの向上、労働参加、 そして「アラブの春」—

東京大学大学院 総合文化研究科

特任准教授 辻 上 奈美江

1. 女性議員任命でジェンダー指標が改善される見込みとなったサウジアラビア

今年1月、サウジアラビアではじめて30人の女性諮問評議会議員が任命され、150議席のうち実に20パーセントを女性が占めることになった。これまで女性議員が皆無であったことに鑑みれば、サウジアラビアにとって画期的な変化である。国連開発計画の『人間開発報告書2013』によれば、サウジアラビアのジェンダー不平等指数は147カ国中145位、世界経済フォーラムが発表する『グローバル・ジェンダー格差報告2012』のジェンダー格差の順位は135カ国中131位である。サウジ政府は女性議員の任命に加えて、女性の雇用機会の拡大を急いでおり、女性の政治参加と経済参加の両方が改善される見通しが立った。来年は国際機関のジェンダー関連指数の順位も一気に上昇することが確実視される。

国王への進言・勧告・提案機関と位置づけられる諮問評議会は、厳密には立法機関ではない。諮問評議会で発議された法案は、閣議と国王に承認されれば法（正式には「規則」）として成立する仕組みとなっており、対外的には議会に相当するものとして位置づけられている。議員は全員、国王による任命制で、150名の議員はこれまですべて男性によって占められていた。2006年から女性の非常勤顧問が任命され、女性も部分的に諮問評議会に参加してきた。だが同国に

おける女性の政治参加は遅れており、2005年と2011年に実施された地方選挙においても女性は投票も立候補もすることが許されなかった。地方選挙への女性の参加は2015年にまで持ち越される予定である。2009年によりやく女性の教育副大臣が誕生したが、女性への政治的権利の付与は湾岸諸国のなかでももっとも遅れている。

そのような状況でなぜ、女性議員が任命されたのか。どのような女性が議員となり、彼女らはサウジアラビアの国づくりにどのように参加しようとしているのか。そして人びとは女性議員の誕生をどのように受け止めているのか。さらに、女性議員誕生の社会的背景とはなにか。本稿では、それぞれの問題を、諮問評議会のホームページや、今年3月に首都リヤドで実施した現地調査の結果を踏まえて考察する。

2. 「三高」の諮問評議会議員

諮問評議会のホームページでは議員全員の略歴を掲載しているが、すべての議員について特徴的なことは、第一に学歴の高さである。男女ともに高学歴者が多数を占めていて、議長と副議長を含む152人の議員のうちドクターの称号を有するものが110人である。「ドクター」は博士号を有する者と医師に付されているので、73パーセントは博士号取得者か医師であることになる。高学歴の傾向は女性議員についてもあてはまる。女性30人のうち、24人が博士号取得者、

2人が修士号取得者、2人は学士号取得者（いずれも医師）で、学歴が不明の残りの2名は王族である。王族女性はいずれも歴代国王の娘であり、学校経営や大学経営に携わってきた人物であった。男性議員は海外での学位取得者が多く、アメリカでの取得者は73人（うち女性が6人）、イギリス24人（うち女性3人）、フランス3人、エジプト3人、オーストラリア1人、日本1人であった。132人の男性議員のうち115人が海外での学位取得者となる。とりわけアメリカやイギリスでの学位取得者が多数派を占めた。男性議員が海外での学位取得者が多数派を占めるのに対して、女性議員は30人中18人が国内での学位取得者である。男性には海外留学の機会が与えられてきたが、女性の留学には制約があることを反映していると考えられる。また男性議員のほとんどは写真付きでプロフィールを公開したのに対して、女性のうち写真を公開したのは4人のみであった。

もうひとつの特徴は、任命された女性議員の年齢の高さである。生年を公表している女性議員18人のうち1930年代生まれが1人、1940年代生まれが3人、1950年代生まれが6人、1960年代生まれが5人、1970年代生まれが3人であった。男性議員についても年齢構成は高い傾向にある。人口の半分以上が24歳以下であるこの国においては、議員の年齢層は人口構成との比較では非常に高い。議員の年齢の高さは実績を重視したことも関連しているようである。任命された女性のなかには、国連人口基金事務局長を務めたスライヤ・ウバイドや、ファハド前国王の眼科医を務めたとされるサルワー・アル＝ハッザーアなども含まれている。アル＝ハッザーアを含む5人が医師、教育学およびそれに関連する学問を修めた人物が6人のほか、原子物理学、がん遺伝子学などの専門家もいる。実績重視の人選が行われたといえる。全体としては、諮問評議会議員は、男女ともに、高学歴、

筆者紹介

2008年神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程修了。博士（学術）。日本学術振興会特別研究員、高知県立大学講師などを経て現職。

著書に『現代サウジアラビアのジェンダーと権力』（福村出版、2011年）、共著に『中東政治学』（有斐閣、2012年）『中東イスラーム諸国民主化ハンドブック』（明石書店、2011年）『グローバル政治理論』（人文書院、2011年）、共訳に『中東・北アフリカにおけるジェンダー』（明石書店、2012年）『21世紀のサウジアラビア』（明石書店、2012年）など。

専門は中東地域の比較ジェンダー論および地域研究。

高年齢、そして高実績者の集団といえる。

3. 女性議員、議員の家族、そして人びとの反応

現地調査では、諮問評議会議員に任命された女性二人とそのうち一人の夫、男性議員一人、そしてその他数名の人びとから女性議員が任命されたことについて意見を聴取することができた。議員を含めた全員が実名の公表に消極的であったため、以下では実名での表記は避けることとする。

1957年生まれの議員Aは、サウジアラビア人女性で初めてサウード王大学医学部を卒業し、医師となった経歴を有する。Aは、諮問評議会議員として実践すべき目標は「すべてのサウジ人の抱える問題や困難について、諮問評議会において議論すること」であるという。新たに女性議員を迎え入れた諮問評議会では、今、女性の就労環境に関する議論が行われている。このテーマに関してAは、女性が働きやすい環境を提供することの重要性を訴える。女性が働きやすい環境には、たとえば育児と仕事との両立が含まれる。現在、サウジアラビアには保育園や幼稚園が存在しない。そのため、働く女性の多くは勤務中、家事労働者に子どもの世話をさせているが、「女性の多くは、家事労働者に子どもをあずけることに不安を感じている。安心して子どもをあずけられる保育園や幼稚園の設置が急務である」という。子育て世代の女性の短時

間労働を導入することも提案した。また、車社会にもかかわらず女性には自動車の運転が禁じられていることも、女性の労働環境の足かせになっている。ただし、Aは女性の運転解禁を求めているわけではない。むしろ、女性が安心して利用できる安全で清潔な公共のバスを運行させることを要求している。

とはいえ、諮問評議会では女性議員は女性や家族、子どもの問題のみについての意見を求められているわけではない。議員は自らの関心や専門に沿った委員会に所属して活動する。Aは医師であるが、メディアに関心があるためメディア情報委員会への所属を希望して受け入れられた。また、従来の女性非常勤顧問は2階の女性専用傍聴席で会議に参加するだけだったが、正規の女性議員は、傍聴席ではなく男性議員と同じ会場で参加しているという。Aによれば「女性議員は男性とほぼ同等の役割を期待されている」が、ひとつだけ女性として特別な質問を受けたという。それは外遊に参加できるかどうかであった。女性議員らは「参加不可」、「マフラム（夫や父親など男性の同伴者）とともに参加可能」、「マフラムなしで参加可能」の三つの選択肢のうち、どれかひとつを選ぶことが求められた。Aは単独での参加を希望したという。

Aは、女性議員が誕生したことのメリットは、「女性は男性とは異なる視点でものごとを捉える」ことであると指摘する。Aのような医師のほか、さまざまな分野の専門家で構成される女性議員たちは、初日から積極的に議論に参加し、疑問点や納得のいかない点について徹底的に追求したという。

議員Bもまた、高い学歴と実績を有する人物である。Bはアメリカで博士号を取得し、行政訓練学校の女性部門長を務めた経験を有する。Bは、諮問評議会議員に任命されたことについて「諮問評議会を批判したこともあったので、任命は予想外だった」と答えたが、文化情報省

をはじめとする複数の政府機関の顧問や委員経験者でもあり、任命されるべくして任命された人物のひとりといえる。Bは、任命された女性議員の構成について、複数の分野の専門家になる、都市と地方の両方に配慮した、宗教観の観点からもバランスのとれた任命だと評価した。Bは保健行政学が専門で、教育・研究や学校運営に携わるなど、女性の教育や保健とケアの問題に造形が深い。議員としては、患者の権利を中心に政府サービスの質の向上の必要性を訴えることを使命としている。

Bへのインタビューから、女性議員誕生の社会的インパクトの大きさが明らかになってきた。Bの任命が公表されると彼女のツイッターにはツイートが殺到した。保守的な人物から手紙が送りつけられ、女性の運転やスポーツ、そして国連の「女性差別撤廃条約」に反対するよう要求されたこともあったという。Bが任命の内定通知を受けたのは発表直前であったこともあり、Bはあわててツイッターのアカウントを閉め、誰に閲覧されても良いようなアカウントを開設しなおしたという。

諮問評議会への任命は、家族の心配も招いた。Bの母親は、諮問評議会議員に任命されれば、Bの顔が公のもとに明らかになるのではないかと心配したという。サウジアラビアでは、女性の性の管理は家族の名誉と直結している。女性の顔をアウラ（性器）と考える人もいるので、顔を公表することに慎重になる人は多い。一方、Bはサウジアラビアの性規範を活用もしている。外遊の可否の質問について、Bは「マフラム同伴で参加可能」を選択したという。夫の同伴にかかる費用を諮問評議会が負担してくれる制度があるなら、夫同伴で参加できるほうが良いと考えたという。配偶者の旅費まで負担してもらえるのはサウジ人女性ならではの特権といえる。ただし、Bはマフラムを同伴せずに海外に渡航することに問題を感じている訳ではな

い。最近、内務省が開始した国民の電子データ照合サービスによって、女性が出国した際に彼女の後見人である父親や夫の携帯電話にメールが送信されるシステムについて「なぜ諮問評議会議員になってもなお、夫に監視されなければならないのか」と批判的に捉えていた。

では、女性議員の夫は、妻の任命をどのように受け止めているのか。Aの夫は、「私の妻を議員に選んだ政府の選択は適切だった」と誇らしげに答えた。Bの夫には面会できなかったものの、BによればBの夫も任命を喜んだという。Bの顔については、母親の懸念が的中し、結局、複数の媒体で流通することになった。以前はBの夫もBの顔が公開されることについて否定的だったが、「諮問評議会議員として責任ある仕事を果たさなければならないことを理解し、今では顔を隠すよう要求されることはなくなった」という。Bは冗談を込めて「私が年をとったので、夫は私が顔を出すことを気にしなくなったのかもしれない」とも回答している。若い女性はしばしば性秩序をゆるがす存在ともみなされており、任命された女性の年齢層が比較的高かったのは、家族や保守派への配慮とも関連していると考えられる。

今回の調査で意見を聴取できた男性議員は一人のみであったが、彼は女性の議員が加わったことについて、「当然起こるべき変化である。時代は変化しており、女性抜きに社会の問題を議論することはできない」と述べた。諮問評議会では、複数の女性が非常勤顧問として活動してきた経緯もある。男性議員にとっては、正規の女性議員の誕生は時間の問題だったのだろう。

議員以外の人びとの反応はさまざまであった。たとえば民主化をはじめとする改革の必要性を訴える研究機関勤務の40歳代の男性は、女性議員の任命を批判はしなかったものの、「優先課題ではない」と語る。改革を求める多様な声があるなかで、諮問評議会の権限強化こそが優

先課題であると訴えた。他方で、30歳代の大学勤務の男性研究者は、「女性の教育レベルが向上し、留学生も増え、就労者も増えた今、女性を無視することはできない」として諮問評議会における女性の任命を歓迎した。

女性たちの反応もさまざまである。政府系機関で働くかたわら食品製造販売のビジネスに従事する40歳代の女性は、諮問評議会の機能そのものに否定的である。彼女は、「諮問評議会は、議論しているだけで何も実行に移せない」として、女性議員任命も形式的なものにすぎないと考えている。実際に「諮問評議会議員は、議論するだけで高い給料を支払われている」といった妬みは、サウジアラビア国内ではある程度流通している。そのためか諮問評議会への女性議員任命について「無関心だ」と語った人もいた。もちろん否定的な見解のみではない。リヤドで医師として働く40歳代のある既婚女性は、「諮問評議会で発議された議案はほぼ通過しており、実質的な役割を果たしている。諮問評議会に女性が任命されたことは歓迎すべきである。たとえばビジネスの世界であれば、ビジネスに携わる女性のみが抱える問題もあり、女性の視点が必要とされている」という。ただし彼女は「任命よりは選挙で議員を選ぶほうが良い」という。というのも、「議員に任命された人物はみな有名人ばかりで、教育レベルも高く、博士号取得者が多い。彼らに教育を受けていない人のことを理解することは難しい。社会の底辺を理解できる人が議員になることが望ましい」と述べた。脚本家として活躍する30歳代の独身女性も、「女性議員が任命されたことは良い。さまざまな職業、出身地域や思想の人物が選ばれたので、さまざまな見地から女性のニーズについて声を上げてくれるだろう」と期待を膨らませた。

4. なぜ今、女性議員が誕生したのか

ではなぜ、このタイミングで女性議員が誕生

したのか。短期的な契機は「アラブの春」であったと考えられる。諮問評議会は2006年に女性の非常勤顧問を任命し、顧問はそれぞれの専門分野に沿った役割を果たしてきた。男性議員が回答したように、女性の正規議員の誕生は時間の問題であったことは間違いない。しかし、女性が「女性本来の役割」とされる母や妻としての役割をこえて家庭外で活躍することに反発する層が人口の一定の割合を占めていることも否定できない。実際にリヤド州の北西のカシム州では、女性議員が任命されるとそれに反対する人びとが抗議行動を起こしたとの情報もある。

2011年初旬に起きた「アラブの春」は、サウジアラビアの体制を揺るがすことはなかったものの、実現されないままとなっていた複数の課題へのアラートとなった。とくに女性が各地で抗議行動を主導したことはインパクトがあった。1月、洪水が起きたジッダでインフラ整備を求めて最初に声を挙げたのは女性であった。また、2月に首都リヤドの内務省前でテロ容疑者として拘束され続けている家族の釈放を求めて立ち上がったのも女性であった。そして5月以降に東部州を中心に高まった自動車運転解禁要求運動の共鳴者は、規模こそ小さかったが各地で自動車を運転して運転解禁を求めた。

筆者のインタビューに回答してくれた複数の人物が指摘しているように、女性はもはやサウジ社会において軽視できない存在になっている。その背景には、過去十年あまりで政府が重点的に実施してきた高等教育の拡充がある。1990年代に20以下だった大学の数は2000年代に入って急激に増加し、今では60以上となった。2007年に政府が発表した『人口動態調査報告書』では、大学入学者数は男性が30万9,000人に対して女性が43万2,000人とされており、女性の大学進学者数が圧倒的に男性を上回っている。また、学士以上の学位を有する人口は、男性が69万人

に対して女性は64万人である。近い将来、学士以上の学位取得者は女性が男性を凌駕するだろう。2011年5月、首都リヤドに複数の単科大学を統合してプリンセス・ヌーラ大学が開校したことも、このような女性の大学進学者の増加と無関係ではない。300万平米の敷地に建設された女子大学は世界最大の敷地面積を誇っており、1万人以上の学生が宿泊できる学生寮が併設されている。

教育レベルが上昇して次に問題になったのが、雇用である。CIA（アメリカ中央情報局）は15～24歳のサウジ人女性の失業率を45.8%と見積もっている。女性たちの多くは、大学を卒業しても職に就けない問題に直面している。かつて女性の働く分野は教育か医療、そうでなければ銀行に限定されていた。この背景には、女性を雇用する際には、雇用主が女性専用のスペースを提供することが労働法で義務づけられていた事情もある。しかし、2005年には労働法が改正され、女性も男性と同じ職場で働けるようになった。

女性が労働市場に参入するようになれば、女性の通勤の問題に加えて、子育てを含む家事労働を誰が負担するかといった問題が噴出する。教育、生産労働そして家事労働など女性の生活に変化が起き、女性の視点に立つことのできる議員が必要とされるようになった。そこに女性主導の抗議行動が複数回にわたって起き、女性議員の誕生が一気に実現に向けて動き出したと思われる。

5. 今後の展望と課題

かつてアブドゥッラー国王は「私の母、姉妹、娘、妻は皆女性である」と発言して、女性の地位と権利を守ろうとした。しかし今や女性は母、姉妹、娘、妻であると同時に重要な労働力でもある。家計の観点からは稼ぎ手としての役割も期待されている。複数の回答者が指摘したよう

に、女性は家庭外でも家庭内でも無視できない存在になった。国王が諮問評議会と地方評議会への女性の参加を約束したことは、女性が労働力として、そして政治的アクターとして認められたことを意味している。

諮問評議会議員には従来から高学歴のテクノクラートが任命されてきたが、女性の任命についてもほぼ同様の傾向が見られた。女性議員もまた高学歴、高年齢、そして高実績の「三高」で、それぞれの専門に沿った活動が期待されている。男性議員と異なる点は、彼女ら家族や名誉といった女性のみ求められる文化的規範に配慮したり、戦略的に活用したり、あるいは時にはそれを乗り越えることが必要とされること

だろう。

高学歴こそその課題もある。若者が深刻な失業に悩む社会で、比較的年齢の高いエリート集団が国や社会の問題に取り組もうとしている。協力的な家族に支えられたエリート女性が、経済的理由で運転手や家事労働者を雇えない女性が抱える問題等にどこまで接近できるかは未知である。一部の人びとの中で共有される諮問評議会議員に対する妬みは、格差の裏返しでもある。若い世代で失業問題が深刻化している今、諮問評議会議員を含むエリートと非エリートの格差の是正は、男女の差異に優先して取り組むべき課題である。